多段階 let 挿入を行うコード生成言語の 設計

大石純平

筑波大学 大学院 プログラム論理研究室

2016/7/12

アウトライン

- 1 概要
- 2 研究の背景
- 3 研究の目的
- 4 研究の内容
- 5 まとめと今後

アウトライン

- 1 概要
- 2 研究の背景
- 3 研究の目的
- 4 研究の内容
- 5 まとめと今後

コード生成法:プログラムの実行性能の高さ、保守性・再利用 性を両立

コード生成法:プログラムの実行性能の高さ,保守性・再利用 性を両立

• コード生成言語の型安全性に関して破壊的代入を持つ言語 体系に対する Sudo らの研究がある

コード生成法:プログラムの実行性能の高さ,保守性・再利用 性を両立

- コード生成言語の型安全性に関して破壊的代入を持つ言語 体系に対する Sudo らの研究がある
- しかし、多段階の let 挿入を扱うようなコード生成言語の安全性は保証していなかった

コード生成法:プログラムの実行性能の高さ,保守性・再利用 性を両立

- コード生成言語の型安全性に関して破壊的代入を持つ言語 体系に対する Sudo らの研究がある
- しかし、多段階の let 挿入を扱うようなコード生成言語の安全性は保証していなかった
- ⇒ 多段階の let 挿入を安全に扱うために型システムを改良した。

アウトライン

- 1 概要
- 2 研究の背景
- ③ 研究の目的
- 4 研究の内容
- 5 まとめと今後

段階的計算 (Staged Computation)



- コード生成ステージとコード実行ステージ
- ⇒ 段階的計算をサポートするプログラム言語 ⇒ コード生成言語

power 関数のコード化

power 関数のコード化

8に特化したコードの生成を行う

```
{\sf gen\_power} \; x \; \; 8 \; = \; \; x \; * \; x
```

power 関数のコード化

$$\begin{array}{rcl} \mbox{power }x & n & = & x & & \mbox{if} & n = 1 \\ & & x * \mbox{power }x \; (n-1) & & \mbox{if} & n > 1 \end{array}$$

8 に特化したコードの生成を行う

```
\mathsf{gen\_power} \ x \ 8 = \ x \ast x
```

 $gen_power x 8$ は power x 8 より高速

- 関数呼び出しがない
- 条件式がない

コード生成の利点と課題

利点

• 「保守性・再利用性の高さ」と「実行性能の高さ」の両立

コード生成の利点と課題

利点

• 「保守性・再利用性の高さ」と「実行性能の高さ」の両立

課題

- パラメータに応じて、非常に多数のコードが生成される
- 生成したコードのデバッグが容易ではない
- **⇒** コード生成の前に安全性を保証したい

従来研究

- コード生成プログラムが、安全なコードのみを生成する事 を保証
- 安全なコード: 構文, 型, 変数束縛が正しいプログラム

従来研究

- コード生成プログラムが、安全なコードのみを生成する事を保証
- 安全なコード: 構文.型.変数束縛が正しいプログラム

しかし多段階 let 挿入等を実現する計算エフェクトを含む場合のコード生成の安全性保証は研究途上

- 入れ子になった for ループなどを飛び越えたコード移動を許す仕組み
- ループ不変式の移動によって、効率的なコード生成に必要なプログラミング技法

$$\begin{aligned} & \textbf{for } i = 1 \textbf{ in} \\ & \textbf{for } j = 1 \textbf{ in} \\ & y = t \\ & a[i][j] = b[i] + y \end{aligned}$$

for
$$i=1$$
 in for $j=1$ in $y=t$ $a[i][j]=b[i]+y$

for
$$i=1$$
 in
for $j=1$ in
 $y=t$
 $a[i][j]=b[i]+y$

for
$$i=1$$
 in $y=t$ — ${\sf t}$ が i にのみ依存し j には依存しない式 for $j=1$ in $a[i][j]=b[i]+y$

$$\begin{aligned} & \textbf{for } i = 1 \textbf{ in} \\ & \textbf{for } j = 1 \textbf{ in} \\ & y = t \\ & a[i][j] = b[i] + y \end{aligned}$$

$$y=t$$
 — t が i にも j にも依存しない式 for $i=1$ in for $j=1$ in $a[i][j]=b[i]+y$

コントロールオペレータ

プログラミング言語におけるプログラムを制御する プリミティブ

- exception (例外): C++, Java, ML
- call/cc (第一級継続): Scheme, SML/NJ
- shift/reset (限定継続): Racket, Scala, OCaml
 - 1989 年以降多数研究がある
 - コード生成における let 挿入が実現可能
- shift0/reset0
 - 2011 年以降研究が活発化。
 - コード生成における多段階 let 挿入が可能

アウトライン

- 1) 概要
- 2 研究の背景
- 3 研究の目的
- 4 研究の内容
- 5 まとめと今後

研究の目的

表現力と安全性を兼ね備えたコード生成言語の構築

- 表現力: 多段階 let 挿入, メモ化等の技法を表現
- 安全性: 生成されるコードの一定の性質を静的に検査

研究の目的

「表現力と安全性を兼ね備えたコード生成言語の構築

- 表現力: 多段階 let 挿入, メモ化等の技法を表現
- 安全性: 生成されるコードの一定の性質を静的に検査

本研究: 簡潔で強力なコントロールオペレータに基づ くコード生成体系の構築

- コントロールオペレータ shift0/reset0 を利用し、let 挿入などのコード生成技法を表現
- 型システムを構築して型安全性を保証

アウトライン

- 1 概要
- 2 研究の背景
- ③ 研究の目的
- 4 研究の内容
- 5 まとめと今後

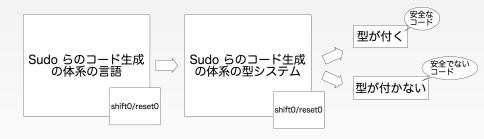
行うこと

- コントロールオペレータ shift0/reset0 を利用し、深く入れ 子になった内側の shift0 からの let 挿入 (多段階 let 挿入) な どのコード生成技法を行える言語の設計
- shift0/reset0 を持つコード生成言語の型システムの設計

困難・問題点

- shift0/reset0 は shift/reset より強力であるため、型システム が非常に複雑
- コード生成言語の型システムも一定の複雑さを持つ
- ⇒ 単純な融合は困難

本研究の手法



clet
$$x_1 = \%3$$
 in
clet $x_2 = \%5$ in
clet $y = t$ in
 $(x_1 + x_2 + y)$

```
 \begin{array}{l} \textbf{reset0} \quad \textbf{clet} \ x_1 = \%3 \ \textbf{in} \\ \textbf{reset0} \quad \textbf{clet} \ x_2 = \%5 \ \textbf{in} \\ \textbf{shift0} \ k_2 \ \rightarrow \ \textbf{shift0} \ k_1 \ \rightarrow \ \textbf{clet} \ y = t \ \textbf{in} \\ \textbf{throw} \ k_1 \ (\textbf{throw} \ k_2 \ (x_1 \ \underline{+} \ x_2 \ \underline{+} \ y)) \end{array}
```

```
reset0 clet x_1 = \%3 in

reset0 clet x_2 = \%5 in

shift0 k_2 \rightarrow shift0 k_1 \rightarrow clet y = t in

throw k_1 (throw k_2 (x_1 \pm x_2 \pm y))
```

 $k_2 = \text{clet } x_2 = \%5 \text{ in}$

clet
$$y = t$$
 in
clet $x_1 = \%3$ in
clet $x_2 = \%5$ in
 $(x_1 + x_2 + y)$

clet
$$x_1 = \%3$$
 in
clet $x_2 = \%5$ in
clet $y = t$ in
 $(x_1 + x_2 + y)$

shift0/reset0 による多段階 let 挿入の結果

clet
$$x_1 = \%3$$
 in
clet $x_2 = \%5$ in
clet $y = t$ in
 $(x_1 + x_2 + y)$

```
e_2 = \underline{\mathsf{reset0}} \quad \underline{\mathsf{clet}} \quad x_1 = \%3 \quad \underline{\mathsf{in}}
\underline{\mathsf{reset0}} \quad \underline{\mathsf{clet}} \quad x_2 = \%5 \quad \underline{\mathsf{in}}
\underline{\mathsf{shift0}} \quad k_2 \quad \to \quad \underline{\mathsf{shift0}} \quad k_1 \quad \to \quad \underline{\mathsf{clet}} \quad y = t \quad \underline{\mathsf{in}}
\underline{\mathsf{throw}} \quad k_1 \quad (\underline{\mathsf{throw}} \quad k_2 \quad (x_1 + x_2 + y))
```

```
e_2 = \mathsf{reset0} \ \mathsf{clet} \ x_1 = \frac{4}{3} \mathsf{in}
        reset0 clet x_2 = \%5 in
        shift 0 k_2 \rightarrow \text{shift } 0 k_1 \rightarrow \text{clet } y = t \text{ in } 0
        throw k_1 (throw k_2 (x_1 + x_2 + y))
             e_2 \leadsto^* \mathsf{clet} \ y = t \mathsf{ in}
                        reset0 clet x_1 = \frac{3}{3} in
                        reset0 clet x_2 = \%5 in
                        (x_1 + x_2 + y)
```

$$e_2 \rightsquigarrow^* \frac{\text{clet } y = t \text{ in}}{\text{reset0}}$$
 $\frac{\text{reset0}}{\text{clet }} \frac{\text{clet }}{x_1 = \%3 \text{ in}}$
 $\frac{\text{reset0}}{(x_1 + x_2 + y)}$

t= %7 のとき e_2 は型が付く $t=x_2$ か $t=x_1$ のとき e_2 は型が付かない

```
e_1 = {\tt reset0} \quad {\tt clet} \quad x_1 = \%3 \; {\tt in} {\tt reset0} \quad {\tt clet} \quad x_2 = \%5 \; {\tt in} {\tt shift0} \quad k \quad \rightarrow \quad {\tt clet} \quad y = t \; {\tt in} {\tt throw} \quad k \; (x_1 \; {\tt +} \; x_2 \; {\tt +} \; y)
```

$$e_1 = \underbrace{\mathsf{reset0}}_{\mathbf{clet}} \ \underbrace{clet}_{x_1} = \%3 \ \underline{\mathsf{in}}$$

$$\underbrace{\mathsf{reset0}}_{\mathbf{clet}} \ \underbrace{clet}_{x_2} = \%5 \ \underline{\mathsf{in}}$$

$$\underline{\mathsf{shift0}} \ k \ \to \ \underline{\mathsf{clet}} \ y = t \ \underline{\mathsf{in}}$$

$$\underline{\mathsf{throw}} \ k \ (x_1 \ \underline{+} \ x_2 \ \underline{+} \ y)$$

$$e_1 \rightsquigarrow^* \underline{\text{reset0}} \quad \underline{\text{clet}} \ x_1 = \%3 \ \underline{\text{in}}$$

$$\underline{\text{clet}} \ y = t \ \underline{\text{in}}$$

$$\underline{\text{reset0}} \quad \underline{\text{clet}} \ x_2 = \%5 \ \underline{\text{in}}$$

$$(x_1 + x_2 + y)$$

$$e_1 = \underbrace{\mathsf{reset0}}_{\mathbf{reset0}} \underbrace{\mathsf{clet}}_{x_1} x_1 = \%3 \underbrace{\mathsf{in}}_{x_2}$$

$$\underbrace{\mathsf{reset0}}_{\mathbf{shift0}} \underbrace{\mathsf{clet}}_{x_2} x_2 = \%5 \underbrace{\mathsf{in}}_{x_2}$$

$$\underbrace{\mathsf{shift0}}_{\mathbf{throw}} k \underbrace{(x_1 + x_2 + y)}_{x_2}$$

$$e_1 \rightsquigarrow^* \underline{\text{reset0}} \quad \underline{\text{clet}} \quad x_1 = \%3 \ \underline{\text{in}}$$

$$\underline{\text{clet}} \quad y = t \ \underline{\text{in}}$$

$$\underline{\text{reset0}} \quad \underline{\text{clet}} \quad x_2 = \%5 \ \underline{\text{in}}$$

$$(x_1 + x_2 + y)$$

t=%7 か $t=x_1$ のとき e_1 は型が付く $t=x_2$ のとき e_1 は型が付かない

変数スコープの利用 by Sudo

一般的な shift0/reset0 (throw) の式の形

 $(\underline{\mathsf{reset0}} \ ... \ (\underline{\mathsf{shift0}} \ k \to \ ... \ (\underline{\mathsf{throw}} \ k \ ... \)))$

変数スコープの利用 by Sudo

- γは変数のスコープを表す。
- その時点で使える自由変数の集合と思ってもらえば良い.
- γ には、包含関係があり、それを $\gamma_1 \geq \gamma_0$ というような順序 で表している。
- 直感的には γ_0 より γ_1 のほうが使える自由変数が多いという意味である.

```
(\underline{\mathbf{reset0}} \ \gamma_0 \ (\underline{\mathbf{shift0}} \ k \rightarrow \ \gamma_1 \ (\underline{\mathbf{throw}} \ k \ \gamma_3)))
```

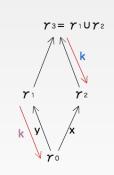
shift0/reset0 による let 挿入が型安全性を保つ条件

一般的な shift0/reset0 (throw) の式の形

 $(\underline{\mathsf{reset0}} \; ... \; (\underline{\mathsf{shift0}} \; k \to \; ... \; (\underline{\mathsf{throw}} \; k \; ... \;)))$

shift0/reset0 による let 挿入が型安全性を保つ条件

```
\begin{array}{l} (\underline{\mathsf{reset0}} \ \underline{\mathsf{clet}} \ y = \dots \ \underline{\mathsf{in}} \ \dots \\ (\underline{\mathsf{shift0}} \ k \to \ \underline{\mathsf{clet}} \ x = \dots \ \underline{\mathsf{in}} \ \dots \\ (\underline{\mathsf{throw}} \ k \dots))) \\ => \\ (\underline{\mathsf{reset0}} \ \underline{\mathsf{clet}} \ y = \gamma_0 \ \underline{\mathsf{in}} \ \gamma_1 \\ (\underline{\mathsf{shift0}} \ k \to \ \underline{\mathsf{clet}} \ x = \gamma_1 \ \underline{\mathsf{in}} \ \gamma_2 \\ (\underline{\mathsf{throw}} \ k \ \gamma_3 \ ))) \end{array}
```



$$\begin{array}{l} k : (\langle \cdot \rangle^{\gamma_1} \Rightarrow \langle \cdot \rangle^{\gamma_0}) \\ k : (\langle \cdot \rangle^{\gamma_3} \Rightarrow \langle \cdot \rangle^{\gamma_2}) \end{array}$$

アウトライン

- 1 概要
- 2 研究の背景
- ③ 研究の目的
- 4 研究の内容
- 5 まとめと今後

まとめと今後

- コードの型システムに shift0 reset0 を組み込んだ 型システムの設計を行った
- その型システムによって型が付く場合と付かない場合の例をみた。
- 今後 answer type modification に対応した型システムを設計 し、(subject reduction 等の) 健全性の証明を行う